和装振興プロジェクト ～伝えよう！和服の魅力～

阿部　栄子　教授
(家政学部　被服学科)

【プロジェクトの目的】

日本の和服には、我が国ならではの「文化」が凝縮されています。また、和服（きもの）が完成するまでの各過程の全てに、日本人の卓越した繊細な職人の心と技が生かされており、世界のどの国の民族衣装にも劣ることのない誇るべき伝統的染織技術によってつくり出されています。本和装振興プロジェクトの開催を通して、世代を超えた人々が広く和服（きもの）に興味をもち、日本文化の理解を深め、着実に後世へと「きもの文化」を伝承していくことを目的として実施しました。

本プロジェクトの活動を通して、きものを多くの人たちが気軽に楽しめる衣服として身近に捉えてほしいこと、製作・着装を含めた実技をも指導できる本格的なプロジェクトチームとして成長したいと考えています。さらに、①きものへの理解、②「きもの」の展示とディスプレイ技法の理解、③きものコーディネートの理解、④ 実施に向けての準備と外部との交渉等の理解などを、実施のキーワードとしています。

【プロジェクトの概要と実施効果】

これまでに、本学家政学部被服学科における卒業研究（和服製作）はいくつもの団体・地域から注目され、数年前から日本橋（東京）における“きものサローネ in 日本橋”において、学生きもの優秀作品として複数点が毎回選定され、毎年、公開展示をして参りました（例えば、日本橋（東京・COREDO室町 2・三井ホール）。今年度も、和服を学ぶ全国の学生作品の中から、本学の学生作品が「学生優秀作品」として選定されました。これらの作品展示実施に向けた実施計画と作品の公開展示の方法、さらにこれらのきものの着装コーディネートを本プロジェクトの学生が担当するものです。展示期間中の展示解説も本プロジェクトメンバーが担当しました（一般展示公開：令和 6 年 10 月 26・27 日、会場：東京国際フォーラムEホール（東京都千代田区丸の内 3-5-1）。令和 6 年度は、和装きもの 3 点（婚礼衣装：色打掛の製作 2 点と訪問着；糸づくりから訪問着の製作 1 点）が選定され、今回で連続 6 回目を迎えました。これまでと同様、これらのきものの作品展示の実施に向けた計画と作品展示、着装コーディネートの担当ですが、学生にとっては初めての経験ばかりで、勉強の積み重ねと戸惑い続きの日々ではありましたがとても有意義な活動となりました。このようなプロジェクトの開催を重ねるごとに、作品の展示方法の向上だけでなく、確実に学生の学びへの士気が深まっていることを実感しました。

続いて、令和 6 年 11 月 16・17 日には、小山市で開催された「小山きものの日」に 3 年のゼミナール生が中心となり、紬地を用いて自ら自分の寸法に仕立てた袷長着を着用したファッションショーを企画運営し､舞台上を思い思いの装いとナレーションとともにランウェイしました｡ショーの企画は、初めての 3 年生でしたが、会場内からは大きな拍手と若者ならではの「きものの着こなし」に、大きな拍手をいただきました。また、当日の様子が、着物専門雑誌「きものサロン」（3 月 1 日発刊、世界文化社）で紹介されました。

プロジェクトに参加した学生全員がこれらの実施を通して、日本文化への理解が更に深まったことだけでなく、活動を通して、学生は沢山の経験ができて自信がついたこと、間違いありません。

充実感がプロジェクトの目的でもある「きもの（和服）」を多くの若い人たちが気軽に楽しめる衣服として、身近に捉えられるようになってきていること、製作・着装を含めた実技の向上、人々の通過儀礼をも解説指導できる本格的なプロジェクトチームとして成長しています。

本学のこの様な学びは、大切にしつつ、今後も教育・研究に望みたいと思います。



「学生きもの優秀作品展」会場；東京国際フォーラム E ホール



11月16日 小山きものの日・栃木

ミニファッションショーを通じ学生たちが考えたきものの未来

右上◇文化センターでの結城紬作品展。右下◇記念式典で挨拶する小山市浅野市長。中◇ミニファッションショーで大妻女子大学学生の発表した「ふりそでドレス」。左上◇学生の制作した結城紬のきものドレス。左下◇参加した学生の皆さんと阿部先生。

結城市と並び、本場結城紬の産地として知られる小山市では、全国的に知られるようになった「きものの日」に合わせ、小山市立文化センターやおやま本場結城紬クラフト館などで、市民をはじめきものファンを集めた交流イベントが開催されました。

文化センターの舞台では小山市・結城市友好都市盟約10周年の記念式典ほか着物ミニファッションショー&トークショーでは、阿部栄子（大妻女子大学被服学科教授）さんの指導する東京の大妻女子大学被服学科の生徒の皆さんが、自分にとってのきものを制作、披露して、その思いも発表。とくに祖母の振袖を裁断することなく着方の工夫でドレスにした「ふりそでドレス」や、結城紬の反物を深緑色の八掛で仕立て、帯とともにドレス風に着こなすなど、ショーではきもの本来の形を残したまま着方で楽しむという、若者らしい柔軟な感覚で見せてくれました。正統派の着方に限らない、広がりのあるきものの魅力を再認識させてくれました。

出典：家庭画報特選「きものサロン 2025 春夏号」世界文化社、p158(2025)